

三浦綾子論 (三)

——「続氷点」をめぐって——

奥野政元

作品「氷点」は、罪の究極のあり所を、陽子の自殺によって明らかにするところで閉じられるが、陽子は死にきれず生により戻されることも暗示されている。パウロの「罪が支払う報酬は死です」(ローマ人への手紙六章二三節)という言葉の一面の真実が、ここに継承されているが、その言葉に続く他の一面の真実、「しかし、神の賜物は、わたしたちの主イエス・キリストによる永遠の命なのです」(ローマ人への手紙・同)は、まだ開示されていない。陽子は生命を取り戻したが、パウロの今一つの真実に気付いていくのであろうか。

それが「続氷点」最大のテーマとなる。四日三晩の昏睡から覚醒した陽子に知らされた新しい事実は、佐石が陽子の父ではなく、中川光夫と三井恵子が本当の父母であったと、写真まで見せられて示される。しかし陽子は直ちに信じることはできない。それ以上に、この二人が夫婦ではなく、夫の出征中に愛し合って陽子が生まれた事実を告げられたことが、陽子の倫理的反発を呼び起こしていく。

陽子にとっては、殺人者の娘として生まれたことと、裏切り背信によって生まれたこととは、何ら変わりのない律法に反する事実であって、その事実を許すことができない限り、自分も両親も許すことができないのである。つまり律法にとらわれた、パウロの言葉で言えば、律法の奴隷であった自殺行為直前の陽子と変わらないということである。いやそればかりではない。たとえ殺人犯としても、佐石夫婦の子として、喜びを以て迎えられた命の方が、裏切りのうちに生まれるよりも、しあわせのような気持さえしている。このような陽子の内面について、作者は啓造の視点を通して、陽子が夏枝に罵られて、はじめて自分の中にも罪の可能性があることを見出し、自分の律法的誇りが傷つけられたことによる少女らしい潔癖さが表れた、そしてそれは「傲慢ともいえる潔癖でもあった。」と説明させている。これが罪の問題であり、以後最大の問題ともなることが、同時に示唆されているようである。しかもこの罪が、陽子の意識を越えた深みに関わっていることも暗示されている。

服毒の五ヶ月後、そろそろ立ち直ってくれないかと願う啓造は、陽子を見本林への散歩に誘う。二人で林の中を歩きながら、陽子は四日間の眠りから覚め際に見た夢を思い出す。暗い淵に押し込められたような息苦しい気分と、目が眩しくなる瞬間とを何度もくり返しながら、いつしか広い野にいろような気がすると、急に誰かが、鼻腔と口を押さえた。それが夏枝であり、おののいて、夏枝の手を払いのけようとすがすがすが、夏枝の手はいっそう強く陽子の鼻腔を押しさえる。(苦しい！おかあさん、助けて！)と幾度か叫んでいるうち、しばらくすると目の前に、般若の面が現れ、ニヤリと笑う、それが夏枝だった。覚醒間際に見たこの夢に、陽子はこだわっていた。それは小学校一年の時、学校から帰った陽子に、化粧をした仮面のような夏枝が、いきなり首を両手でしめつけた恐怖の事件に関わっていてその恐怖が根深く潜在していたかも知れないと陽子は考える。しかし陽子は、決して夏枝を憎んでいるつもりはなかった。しかもなぜあんな夢を見たのか、そういう自分が「たまらなくうとましかった」という。林を出て川岸に立った陽子が、じっと川原を見つめている様子に、不安を感じた啓造が、帰ろうかとうながすと、陽子は、夢とは何かと啓造に聞く。夢とは、意識の底の深く広い無意識に発するものだと説明に、それが全部自分の中から出てくるものであるとすれば、夏枝への憎しみの姿も、自分の真の姿でもあり得るし、夢にも出てこない自分もあり得ると知らされていく陽子は、自分が恐ろしいと言って立ち止まる。その振り返った肩

越しに、美瑛川が鈍く光って流れていた。ルリ子が殺され、陽子が薬を飲んだ同じ場所で、人間と何よりも自分の罪の姿を、陽子は重ね合わせていくのであるが、その陽子に、啓造は恐ろしいことはない、自分の中に未知数があるということは、同時に希望の持てることでもあるから、と言う。これは啓造の、何としてでも、希望を持って生きてもらわねばならないとする陽子への願いに基づく言葉であるが、同時に作品のテーマ、その全体を明示する言葉でもある。

自分にも意識し得ない、しかも自分のうちの奥深いところに発するものとは、確かに自分にとっては未知数のものと言える。であるならば、それは希望に反転する要素も含んだものであるかも知れない。しかしそれがどのようにして可能となるか、それについて、実は啓造自身にもわかっていないわけではない。そればかりか、啓造自身も自ら言った未知数のうちの希望について、何の確かな実感も持ち得てはいない。思いやりもあり、包容力も理解力もあるうえ、ルリ子の死後、陽子をひきとった行為に罪の自覚もありながら、最後まで自分の思慮分別を越えた行動に踏み切れない。愛のために、自己の生命を投げ出した宣教師の行動に、その側にいて心の底から深い感銘を受けながら、その宣教師の生命を受け継いで生きることが、彼には不可能に思われた。自分の罪をも含めたあらゆる事柄に理解を持ちながら、彼はこの未知数の前におののきを込めて立ちつくすのみであり、その一線をまたぎ越したり、くぐり抜ける行動の

経験は持ち得ていない。自分の分別を越えることができず、自分の壁を打ち砕き得ないのである。

同じことは、逆の意味で夏枝にもいえることである。夏枝の人物像は、この点で実に個性的であって、啓造が自己の分別を越えることができないことと関係づけていえば、彼女は自分の感情を越えることができないのである。しかもその感情は、彼女の行動に直結して、邪心とか悪意もなく、彼女にしてみればこの上もなく正直なのである。この正直さが、周囲や他者に波風を引き起こすが、彼女にはかえってそのことが不思議なことさえある。陽子を自殺にまで追いやった自分を、夏枝は夏枝なりに充分懺悔したつもりなのに、覚醒後の陽子の表情が物憂げになる一方であることに対して、次第にうとましくなり、ついには不当な扱いを受けているような屈辱まで感じ始めている。また夏枝は、人の贈り物を心から喜んだことがなく、何か贈られる度に必ず不満を言う。そういう夏枝の性格を啓造は不快に思うが、夏枝は夏枝で、むしろ自分に正直なのである。言葉遣いも丁寧で、動作もしとやか、几帳面で掃除も行きとどき、料理もきめこまやかで、どこから見ても優しい女性に見える彼女の性格を、啓造はふしぎだと思ふ。そして穏やかで包容力もある筈の啓造も、夏枝のこの性格の前には、反発したり、皮肉を言ったりと不満と不快を隠しきれない。二人とも、自分の中では感

情において、また思慮において整合性と統一がとれているのに、あるいはその故に、他者との関係では矛盾と破綻を露呈し、波風が立ち騒ぐ。

この二人の夫婦関係は、背中合わせに似た者同士が一对になっている典型的な関係ともいえよう。二人が似ているとは、おそらくただ一点、つまり自己が他者に対して為した行動の決定的な重さと意味を、自己否定にまで届く切実さで受けとめ得ていない事柄にあるようである。その意味での啓造の行動とは、陽子を佐石の娘と知った上で、迎え入れたことである。自分を裏切った夏枝への復讐、「汝の敵を愛せよ」という命題の実践、あるいは夏枝の女の子が欲しいという願い、啓造の行為はこうした様々な思慮が輻輳して成り立っている。しかし佐石の娘である事実を、夏枝に秘密にすることを決めた時、ルリ子は殺され、夏枝は姦淫をしたという事実と想像に、彼は絶望の底に突き落とされていた。その想像は、後で犯人の子であったことを知る夏枝の驚き悲しみ、口惜しがる様子の想像を産み出す。犯人の子であることを知らない夏枝より、自分の方が苦しいかも知れないが、肉を切らせて骨を断つのだという。その時彼は自分の心の底に、暗い洞窟がぼっかりと口を開けているような恐ろしさを感じ、さらに（心の底などといって、底のあるうちはまだいいのだ。底しれないこの穴の中から、自分でも想像もしなかつた、もっともつと恐ろしいささやきが聞こえてくるのではなからうか。）とも思っている。

ところが、この恐ろしいささやきは、無垢で純粋な優しさを持つ陽子の成長ぶりへの感動という事実としても実現されている。何も知らない家族のうちで、本当のことを隠し続ける啓造は、最初は陽子に手を触れることもできないほどであり、また小学二年生の幼い徹が、陽子をおよめさんにすると言ったとき、彼は徹を「ばか者！」と言ってなぐりつけてさえたが、次第に陽子のこの特性に驚き、感動さえし始める。小学一年生のとき、石を入れた雪玉を投げつけられて肩を痛めた陽子が、相手が叱られるのを思いやって我慢続けたことがあった。陽子が気味の悪いほど善意に満ちた子供で、今まであの子の頭をなでることができなかったのに、ついこの間、頭をなでってしまったが、反射的にルリ子の死んだ姿を思い出して、たまらなくなると、啓造は高木への手紙を書きかけて、出さずに日記に挟み入れていた、その手紙を夏枝に読まれてしまう。啓造の分別が混乱するのに対して、夏枝は啓造の手紙によって事実を知り、烈しい驚愕にうちふるえ、次いで啓造への憎しみと、陽子への拒絶感をつのらせる。夏枝にしてみれば、村井との不倫は、その口づけをうなじに受けただけのことであり、ルリ子が殺され、殺人犯の子を育てるような罰を受けねばならないとまでは考えられない。要するに二人とも、自己の受けた背信と裏切りの行為を、屈辱と感じ、その憎しみに自己正当化の根拠を見出して行動を起こしたのであって、その正当な行為の結果については思い及ぶべくもないのであった。

その結果が、陽子の自殺行為として、彼らの前に実現したとき、しかもそれと同時に陽子が殺人者の娘ではないと知らされたとき、夏枝は「犯人の子でもないものを、そう思いこんで憎みつづけた」ことを思い、「陽子も自分もあわれでならなかった」と感じている。また啓造は「人間の存在そのものが、お互いに思いがけないほど深く、かかわり合い、傷つけあっていることに」、今更のようにおそれを感じている。そして高木に陽子の遺書を差し出しながら、「裁かれるような気持」になっているが、それはだれをも責めず、自分だけを責めた陽子に対しての、責められないことの苦痛でもあった。一方、夏枝が殺人者の娘だと陽子を罵った現場に居合わせた北原は、その真相を知る高木を連れてかけつけたが、ひととき遅かったことを悔い、もう一日早ければ、陽子は自殺しないですんだのに、と言うと、高木は、それを打ち消し、陽子はだれの子に生まれても、いつかはこうなった、罪についてこんななきびしく意識する人間は、だれの子に生まれても、結局同じ考え方をしようになると言う。それに対して啓造は、自分は犯した罪のことを問題にしているが、陽子は罪の根本について悩んだのだ、自分はそこまで悩んだことがないということに気付いている。

このようにして、陽子の自殺行為に最も深くかかわる原因をつくり出した夏枝と啓造と高木の三人は、三人それぞれにその結果の前に引き出されたが、夏枝は陽子にすがって赦しを乞うものの、自ら

も含めて運命的なものに翻弄される人間の哀れを感じるのみであり、高木は「すまん。おれがわるかった」と二度もわびながらも、陽子の罪意識のきびしさに黙然とうなだれるしかない。また啓造は、高木を信頼したことが、悲劇の原因でもあったと考え、人目や自分自身さえ、ごまかし続けた自分も高木も、神の前に立つということを知らなかつたと反省はするが、それが彼らの思慮分別の限界でもあった。運命的悲劇に襲われる人間、あるいは自分自身の愚かしさと哀れが、ここでは、まず前面に響き渡っているのである。

一方、陽子自身は、高木も言うように、罪意識を最も厳しく問いつめて、自らの命を断とうとした。これがどこまでも潔癖であろうとする自尊心の傲慢さでもあることは、すでに指摘したが、陽子は同時にゆるしをも求めていた。ただ罪のゆるしが、どのようなものであるかが、陽子には見当付かないものであった。それは彼女自身が現実的にまた具体的に、罪を犯した実感がないからでもあったことを示してもいる。罪の実感がないところでのゆるしとは、商取引上の貸し借りの整合性を求める形式的行為であり、それに伴う慣習的感情でしかない。ただ陽子は、自分がゆるしを求める対象として、「世界の全ての人々」といい、また「権威あるもの」ともいっている。これは負債の完済を求める以上の、いわば一種の愛を求める願いでもある。自殺者の行為の全体と心情のうちに、このような事情のあることを、実は作者は作中で二度にわたって暗示していた。

一つは「氷点」「千島から松」の章で、北原が初めて辻口家を訪ねて陽子を知った後、斜里の海岸から陽子に宛てた手紙中に、「けさ、この海岸に若い女性がうち上げられて倒れていました。死のうとして、海に入ったのに、波が彼女を岸に運んでしまったのです。浜辺に気絶していたその女性は助かりました。」と書かれていて、死のうとしても死ねない事実には、「厳粛なもの」「単に偶然といい切れない大いなるものの意志を」感じます、と書かれていた。この「大いなるものの意志」に共感した陽子は、自分が辻口家にもらわれてきたことの中にも、それが働いているのか、そしてその意志は「運命」とはちがうようだが、どこが違うのか、と考えている。そして今一つは、同じ「氷点」の「赤い花」の章で、辻口病院で入院していた二号室の正木次郎が、屋上から飛び降りて即死した自殺である。正木はその翌日退院予定であったのに、自殺した。名宛てのない遺書には、「結局人間は死ぬものなのだ。正木次郎をどうして必要だといってくれる世界はどこにもないのに、うろろろ生きていくのは恥辱だ」と書いてあった。病氣は治せても、生きる力を与えることはできなかったと、啓造は正木の自殺に大きな衝撃を受ける。それに対して陽子は、正木の氣持がよくわかるような気がすると、次のようにいう。

わたしも自分がこの世でかけがえのない存在だということが、よくわからないの。本当はどんな人間だってみんな一人一人かけ

がえない存在であるはずなのに、実感としてはよくわからないの。だれかが心から陽子はかけがえない存在だよといってくれたらわかるかも知れないけれど……。正木さんって方も、だれかに強く愛されていたら、死ななかつたと思うの

これら二つの自殺者に対する陽子の反応のうちに、陽子自身の自殺行為への内面過程も暗示されていたのであろう。つまり陽子は、大いなるものからの愛に飢え、激しく求めていたということである。そのことは、陽子が北原と初めて会う場面、見本林の林の中で、彼女が「嵐が丘」に読みふけていたこととも関わる。捨て子だった主人公ヒースリックのキャザリンへの激しい愛に、へただひとつのもの、かけがえないものゝを求めずにはいられない執着を感じ、自分も愛されたいと思っている。そこで北原と出会ったのである。ただヒースリックの激しい執着は、彼の身辺にいた他者にとっては、極悪非道の罪深いものでもあった。このような罪と愛とそして死を迎える人間の営みの背後に、大いなるものの意志を望み見ようとする。そこに陽子の魂の真実もあつたとは言えよう。彼女の自殺行為は、神への必死の求愛的問いかけでもあつたが、それは同時に陽子のはじめて犯した自覚的罪行為でもあつた。

ところが「続氷点」の冒頭、覚醒した陽子が出会った新しい事実とは、彼女の罪行為と認識の意味を大きく反転させるものであつた。

彼女はゆるしを求める側にいたのではなく、ゆるしを求められる側にいたのである。ゆるしを求めることは、一見謙虚な姿勢態度に通じるが、ゆるしの結果責任を相手にゆだねることであつて、自分はほとんど傷つかないことがあり得る。しかしゆるしを求められることは、その結果責任を自分自身で身に負わなければならないことであつて、求めに応じるにしろ、応じないにしろ、自分が無傷であり得ることは、実は少ない。またゆるしを求めながらも、そういう自分を自分にゆるしていないこともある。たとえば、「続氷点」―「命日」の章で、佐石の娘順子からの手紙を啓造に見せた後、陽子は日記に、許すとは、何と困難で不可解なことであろうと書く。順子は手紙の中で、相沢の義父母に連れられて教会に通い、そこでキリストの贖罪を知つて、本当に明るくなつたという。殺人犯の父をゆるすことができたというのであるが、陽子にはそれがわからない。「順子さんがたとえその父親を許しても、殺したという罪の事実はどうなるのだ。殺された人間は再び還らない。」というのである。そして自分を生んだ小樽の母、三井恵子に対しても、自分は許す気持も、詫びたい思いもないが、たとえ許したとしても、その不義の事実が消えるはずはない、と書いている。つまり不義の子としての事実を、陽子は自分にゆるし、受け入れることができないというのである。それは北原に、自分の変心を詫びてゆるしを求めたのに対し、北原が快くゆるしてくれた時も、許された気がしなかつた、なぜなら自分が裏切つたという事実は、厳然としてこの世にとどま

ている気がしたからだということとも通底する問題である。北原にゆるしを求めながら、そういう自分を彼女は自分にゆるしていなかったのである。罪の事実が消滅しない限り、ゆるしは成就しないとすれば、ゆるしを求めたり、ゆるしたりすることに、何の意味があるのか。罪にかかわる陽子の新たな、また根本の躓きが、「統氷点」の主題となる。

確かにそれは、新しい躓きであった。というのも、覚醒後の彼女は、夏枝を潜在的に憎んでいたかも知れない自分にとまどい、啓造から無意識下の自己について聞かされ、そういう自分を恐ろしく感じていた。以後の彼女は、そういう自己内面の罪を意識し始める。

「草むら」の章で、陽子は徹に自分の罪について、「川原で死のうと思つたあの時までは、自分が美しいと思つていたわ。罪深いと気づいたはずなのに、わたしはわたしを肯定していたわ。肯定していたから死のうと思つたのね」と言い、自分はすごくいやな人間だと告白している。しかし一方では、三井恵子に会って好きになつたという徹に反発し、「責めなければならぬことであるのよ、おにいさん。不義によって生まれたということが、わたしの心に、どんな暗い影を落としているか、おわかりになる？」と激しく言いつつている。自分の罪に対する自覚が、他者の罪にも鋭く反応させ、結局人間の不自由さという現実に気づいていくことになる。この不自由さに彼女は躓くのであるが、そこに罪が関わっていること、そし

て実は愛も同時に関わっていることを、やがて彼女は知っていくことになる。

そのきっかけの一つが、松崎由香子の存在である。自分の自殺行為が、あやまった直情徑行的な、また自分の気持ちにだけとらわれていたものであったことは、「著の音」の章でも、松崎が抑制のきかない、非行児の性格だったと指摘する辰子の言葉に、自分の「目の前に短刀を突きつけられたような気持」で、陽子はわがごとくして反省しているところにも示されている。ここで例にあげられた松崎は、以前辻口病院の事務員として勤めているうちに、啓造を愛し、啓造の子を産みたいとまで願っては、愛する人の幸福のため、自分の身体を村井に与えてしまった女性であった。一途に啓造を愛し続けたはてに、他の女性と結婚が決まった村井に、また犯されてしまった後、行方不明になっていたが、「統氷点」では、その十年後、高木に誘われて、啓造が稚内に近い豊富温泉に出かけて呼んだ盲目のマッサージ師として再び登場する。そして何とか目の治療もさせて援助したいと願う啓造達に依頼された辰子が、松崎に会いに出かけ、やがて内弟子のようなかたちで引き取って、同居させることになる。その松崎は、豊富温泉で高木の肩をもみながら、「この二つの目は、好きな人に上げたようなものだ」と言った。

彼女は妻子ある男性への許されない愛を、しかも報いられることもないのを承知で一方的に捧げ尽くしたのであり、二つの目をその人にあげたという言葉には、それが人倫にもとる罪でもあることを

知りながら、抑止できない激しさで自分の愛にすべてをかけたことが象徴されている。しかも彼女はそのことを充分知っているのであり、その自分をゆるしてもいる。両目を失ったこの十年間、自分は天涯孤独で果てるものと諦め、何年間もの淋しさにひっそりと生き続けてきたのである。「嵐が丘」のヒースリックは、自分の愛のために周囲の他者をも犠牲に巻き込んだ激しさを示したが、彼女は自分自身を犠牲にしたのである。その話を聞いた辰子自身も、思想犯だった好きな人に獄死され、その人の子を産んだのに、すぐ死なれた過去を持っていた。「女って、かなしいわねえ」という辰子の言葉には、お互いの過去の行為と姿に対する拒否的感情がほとんど認められない。むしろ愛する人のために、自分のすべてを捧げ尽くした姿に耐え、それをゆるし、やがて自らを空しくしながらも、それをいとおしむように、ひっそりと生きる姿への共鳴の感情がある。松崎は自分の姿が罪でもあったことを知ると同時に、それが自らの愛でもあったことを知るが故に、一切の弁解もしないであろう。つまり盲目になった今でも、自分の存在が不自由だと感じるような発想とは無縁の場所にいるのである。

ところが、この松崎を話題にして、啓造と陽子は、人間にはどうにもしようのないこと、仕方のないことである、人間とは自分の思いどおりにならない不自由な存在だと話し合っている。「夜の顔」の章で、松崎を連れて東京に行く辰子に、夏枝と陽子も同行することになって、松崎と一緒にするのに気が進まないと、陽子が啓造に訴

えたことがきっかけであった。盲目の人の前で、景色を見る心苦しさに他に、奥さんのある人を、好きになったりする人が嫌いだというのが、陽子の理由であった。それに対して、啓造が人間とは不自由な存在だと答えたのであった。陽子はそれを、自分でも感じていた新しい発見だと同調し、どうして不自由になったのかと問うと、啓造は、不自由は人間本来の姿ではないだろうが、それが罪人の証拠といえるかも知れないという。陽子はしばらく考えながら、松崎が啓造を好きになるのは、仕方がないことはわかるが、仕方がないからといって許せることではないと言った。二人、特に陽子にとつて、罪とはなによりも避けるべきこと、拒否すべきことであった。

松崎の存在をかなしいと言って共鳴した辰子と、許せないと拒否した陽子の違いは、自分のすべてを捧げ尽くしてまで人を愛したか否かにある。おそらく松崎も辰子も、自分が愛した行為の事実が、消滅することを願わないであろう。むしろ捧げた事実にとどまって、そこを離れようとはしないのであろう。なぜならこの事実のうちにこそ、かけがえのない愛の実感もあったからである。それを人間の不自由さと感じる人は、愛を欲望と捉え、犠牲とは感じられないということでもある。

愛の中には、他者のために自己を犠牲に捧げる一面があるとすれば、罪には、自己のために他者を犠牲にする一面があるともいえよう。そして罪と愛が、このように犠牲を伴うという点では、実は深く関わるものであるというのが、人間存在の根源的ありようを開示

する問題でもある。人は罪なくして、人を愛し得るのか。特に恋愛に関わる愛においては、他者を愛するということは、当の他者かあるいは別の他者にも決定的な影響を与え、時には自己を、あるいは当の他者か別の他者を犠牲にしまうことにも、それが深いものであればあるほど、結びつくことが多い。近代恋愛小説の根源的テーマにあったのも、この問題であった。そこでは罪の深さと、愛の深さとが、比例するような事柄も見られた。そして時には、欲望の深さを愛と見間違ふエゴイズムの相克が、悲劇的な愛憎のドラマを生み出すことまであった。しかし三浦綾子の描く愛とは、必ずしも欲望ではなく、むしろ犠牲にその重点があった。

松崎の「統氷点」における再登場の意味は、愛と罪を犠牲の視点から眺め直す点で、重要なものであった。たとえば、実際に松崎たちと東京に出て、茅ヶ崎の夏枝の父が紹介したジェラルド・シャンドリの言葉「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなくて、われわれが与えたものである」に触れて、陽子は新しい自分の生きる方向を見いだすような思いもしている。われわれが与えたものとは、犠牲にしたものでもあって、それは松崎の生にも響くものであった。また大学に進学した陽子に偶然出会って、母との関係を知ろうと執拗に追い回す三井達哉の車に、北原が右足をひかれ、切断手術を受けた後、看病しながら北原への愛を自覚し、決断するに影響のあったと思われる三井恵子の夫、弥吉の手紙も、同

じ意味で重要である。

弥吉はその手紙で、息子達哉の引き起こした事故による迷惑を辻口夫婦に詫びながら、自分が嘗て戦争中、中国北支のある部落で、上官の命令とはいえ、妊婦の腹をかき裂く残酷な罪を犯したことを告白している。そのような彼が、復員後立ち直ることができたのは、妻の恵子が自分の出征中、中川と愛し合い、女の子を出産していた事実を知ってからだという。自分の殺した血まみれの胎児がひくひくと動く姿に、苦しみ悩んだ私でなければ、妻が他の男の子にせよ、墮胎もせずひそかに産んでくれた事実には、大きな慰めと、罰を感じて自分を責める気持ちも少なくなった事柄は、わからぬ心境でもありましようといひ、妻を責めずだまされてやろうとしたことが、今回の結果になり、これは本当の問題の解決にはなっていないことが、今この結果を知り、すべてを家族に告白したというのである。そして陽子も自分の出生に悩んでいることを知って、自分の気持ちを伝えて、何らかの力になればと思ったと記していた。

陽子がこの手紙を啓造から受け取ったのは、北原が付き添いを必要とするまで看病した一ヶ月後、旭川の自宅に帰って休んでいた時であった。その直前、啓造と夏枝と交わした会話では、夏枝が今回の事故の責任は、もともと三井恵子の罪だと言ったのに対し、啓造はたしなめるが、陽子は夏枝の言うとおりで、小樽の母が、産んでほならない子を産んだことが、結局北原の足をうばったと言っている。そして徹との結婚を願う夏枝から、北原を愛しているのかと問

われた陽子は、愛とはどういうものか、まだよくわからないと答えている。この会話の後、啓造がこの手紙は陽子が持つのが一番ふさわしいと言って手渡したのである。その一ヶ月後、徹が陽子の下宿を訪ね、思い切ったように徹が、陽子に北原と結婚するつもりだろうねと聞いたのに対し、陽子は静かにうなずく。その一ヶ月後、流水を見るために、陽子は網走に出かけるのである。時間の流れに即して眺めると、以上のようになるが、作品では、達哉が北原を車でひいた直後から、最後の章「燃える流水」に移り、この間、約三ヶ月の経過があったこと、その事実が、今、旅行しながら目にしている網走の流水と雪原の光景に交えて、回想風に描写されていることがわかる。ということは、この章の冒頭では、陽子はすでに北原との結婚を決意しているということである。その上で、改めてこの三ヶ月の経過が叙述されているのである。

このような描写手法をとった作者の意図は、やはり注目されるべきである。つまり、北原への陽子の愛の自覚と意志と決断が、何を焦点として結ばれたかを、より鮮明に描き、構成する意図が明確に見られるということである。この章の結末で、ということは作品の結末でもあるが、流水が燃える感動的な光景が描かれている。そしてそれは、人間の罪とイエスの血による贖罪の愛を象徴していることは周知のところであろう。その結末を準備するためには、なによりも陽子の罪と愛とが、明らかに自覚される過程が必要であった。

こうした視点から、改めてこの章を注意深く眺め直してみると、まず陽子は同じように流水を見に来た青年がカメラを持って歩いていくのを目撃し、その青年には二本の足がある、その当然な事実がもはや北原には失われたのだと思い、三ヶ月前の悪夢のような事故を思い出す、という経過で叙述されていることがわかる。そして自分のワンピースのひもで、ふくれあがる北原の大腿部をしばり、うろろする達哉を励まして、二人で車に運び、近くの店から救急車を呼ぶ。その後、作品では次のような注目すべき叙述がなされている。

救急車の来るまでの二十分あまりが、異様に長く感じられた。苦しみうめく北原の蒼白な顔をみつめて、陽子はいい難い罪の恐ろしさを感じた。

このとき、北原の蒼白な顔をみつめて、陽子の感じた罪の恐ろしさとは、具体的に何を指して言われたものであったのか。事故の直接的な原因は、達哉の過失でもあり、罪はそこにあるともいえるが、そのさらなる原因をたどれば、三井恵子の不倫による出産にまで遡ることも可能であろう。事実、回想風に叙述された事故の一ヶ月後、旭川に戻った陽子が啓造夫婦と交わす会話では、すでに述べたように、そのことを話題にしていた。しかしそのとき、啓造が自分の過失や罪を忘れてしまつて人のことを問題にすべきではないと、

ルリ子の事件を持ち出すと、夏枝は人を責めることは誰にでもできると言いつづけた、その言葉に、陽子は痛い思いをし、順子が殺人犯の父をゆるしているのに、自分はまだ小樽の母をゆるしていないのに気づいている。このとき、陽子はまだ三井弥吉の手紙を読んではいなかった。そして北原の右足切断を回想した直後の網走での陽子は、流氷の上に舞い降りたカラスを見、(あのカラスにさえ、両足がある)と、同じことを思い、人を見ても、犬を見ても、足ばかりが目につくことを感じている。そして北原の看病のために付きた北原が、陽子の弟の達哉によって足を失った」ので、そうせうにはいられなかったのも当然の気持ちだったと説明している。事故の直接の原因は達哉にあったが、それは陽子の弟であり、またそれらの原因のもととなった三井恵子は、陽子の実母でもあった。さらに、北原が事故にあったのは、「あの吹雪の中を、陽子の身を案じて追ってきてくれた」ことそのものにもあったのであって、これらを総合して、身にしみて感じさせられたものが、「罪の恐ろしさ」ということではなかったのか。それが過去の事実を今の視点で眺め直す描写によって明らかにされているのであり、つまり罪は、陽子の存在そのものにも及んでいたということである。

そして、そこに陽子自身の罪があるとすれば、その罪の深さは、北原が右足を犠牲にしてまで陽子を愛していたことの確かさと深さの自覚でもあることを意味する。何を見ても足ばかりが目につ

くとは、陽子の罪と北原の愛を一つに貫く事実の感受に基づく受容のあり方を示している。こうした受容は、出来事そのものの経過のみでは説明しきれないものであり、回想の中でより正確に展望されるものであろう。たとえば、北原の看病で付き添った一ヶ月後、旭川に戻った陽子は、愛することがどういうことかわからないとい、好きと愛することは違うのでは?と答えたが、夏枝は同じことだと言って、啓造に同意を求めると、啓造は、好悪は感情だが、愛は意志的なものだと言え、自分の一番大事なものの、つまり命をあげるができるのが愛だと言っている。陽子はこの言葉を心にとめ、愛ということが、いくらかわかったような気がしている。

命を犠牲にする愛とは、その犠牲を自らにゆるし、意志することでもある。そこに陽子が自らの罪を感じたというのは、その罪が北原によって許されていることを感受したことでもある。罪の事実は消えないと言いつつ、そのような罪をゆるせないと感じ続けていた陽子は、ここではじめて、人も自分もゆるせない自分自身が、なによりもゆるされた存在だったということに目覚めていく。愛が、気分や感情ではなく、意志だというのは、まさにこのゆるしに関わる。罪の事実は消滅することはない。それは受容する以外にはないもので、ここに決断と意志が関わるのである。その受容の決断と意志は、自分がゆるされていることに気づいたときに、はじめて可能となる。ここに三井弥吉の手紙が持つ必然性と意味がある。この手紙は、罪とゆるしをめぐる、衝撃的なものであるが、その内容の焦

点はただ一点にある。それは罪を犯した事実は、ゆるされることによつてのみ、消えるのではなく、受容されるということ、またその罪をゆるされた者のみが、他者をゆるし得るということである。逆に言えば、罪を犯したことはない者、あるいはその自覚のない者は、決して人をゆるさないということである。

この手紙が回想風に叙述された翌日のこと、陽子は白鳥の群れている瀟湘湖の岸に立つ。白鳥が二羽飛び立った後を、他の一羽が追ったがすぐ別の方に飛び去るのを見て、陽子は徹を思う。そして徹に北原への愛を告げた一ヶ月前のことが叙述される。次に網走湖に行つて、中年の運転手から、水雪に閉ざされた番屋に、十五、六年も一人暮らしをする男の話の話を聞く。結婚直前に女に死なれた男が、北海道に渡つてきて住み着いたのだという。そこを出る途中、旅館から白い杖をついた男が出て、急ブレーキをかけた。陽子は由香子を思い出し、はじめて彼女に共感を覚え、身近に感じられてならない。そして刑務所の前にきて、改めて罪を思い、啓造から渡された聖書のヨハネによる福音書、八章一節から十一節が引かれる。それは罪とゆるしにかかわる場面である。姦通の現場から引きずり出された女を、衆人が詰め寄り、ローマ帝国の法律やユダヤ律法に基づき処罰を求め、イエスはどうすべきか宗教学者たちが問いたですと、イエスは沈黙して指で地面に何かを書く。さらに回答を求め群衆に、「あなたがたの中で、罪のない者が、まずこの女に石を

投げつけるがよい」と答えて、イエスは再び地面に何かを書き続けた。やがて群衆は去り、イエスとその女だけが残された。最後に、イエスは女をゆるして去らせる。これを今朝読んだことを思い出した陽子は、痛みを覚える。それは北原の入院した翌日、恵子が陽子を病院で待ち続けて、初めて会い、「陽子さん、ゆるして……」と涙ぐむのを、無視して去った日のことを改めて思い出しながら、自分の非情さと冷たさ、さらには醜さを感じ覚つたからである。

知床とは、アイヌ語で地の果てという意味だと聞いていると運転手は陽子に言った。その地の果ての水原を前にして、陽子はようやく、自分の心の底にひそむ醜さが、はじめてわかつたのである。罪とは事実である限り、消されるべきものではなく、ゆるされるべきものなのであった。陽子は三年前、「罪をハッキリとゆるす権威あるものがほしい」と遺書に書いたはずだったことを、にわかになに蘇つたように思い出す。人間同士のゆるしには、完全はない。ゆるしたつもりが、また憎しみに変わることもある。その移りゆく現実の今までの姿を、陽子は改めて思い起こしながら、自分が嘗て罪に死のうとしたことも含めて、罪の取り消せない事実の深さを、北原の犠牲の深さと等価に感じるばかりか、それを受容しようとする。その確信が、イエスの姦通した女の罪をゆるした言葉のうちに、与えられたように感じ得たのである。流水が燃えだしたのは、このときであった。それを一点の真紅の血の滲みと、作者は表現している。また(天からの血!)とも陽子に思わせ、「キリストが十

十字架に流されたという血潮を、今日の前に見せられているような、深い感動」を覚えさせている。キリストは十字架上で、血潮に染まって人間のためにその命を与えたが、それはキリストの命が失われたということではなく、真の意味で今も生き続けているということである。「一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。」(ローマ人への手紙五章十五節)というパウロの言葉の意味も、ここに開示されている。そのイエスを十字架につけたのは、人間であり、また自分でもあった。「自分がこの世で最も罪深いと心から感じた時、ふしぎな安らかさを与えられることの、ふしぎさ」とも陽子は感じている。また「北原は陽子に足を与えた。とすれば、彼の足は失われたのではない。彼の足は彼の死後もなお、真の意味で生き続けている」とも感じ得た陽子はいま、切実に北原に会いたいと思い、その前に、なによりも先になさねばならないこと、恵子にゆるしを乞うために、電話の受話器をとるのであった。陽子のゆるしに至る受容と決断は、事実として為した彼女の行為と、その意味を後から自分に認識していく回想の中で、このようにして成就していくのであり、その構成の見事さも、よく生かされてあったと言えよう。それは陽子が、真の自由を自分のものとして得ていく道程でもあった。